

## 1. 発表テーマ

「主体性向上サポート ～いつでも、どこでも、誰とでも～」

## 2. 大学の役割

大学の役割を議論した結果、「幸せを迫及する社会を担う人材育成」というキーワードが挙げられた。教育機関である大学が未来を背負って立つ人材、社会で活躍できる人材を育成するために、“学生の主体性を向上させる”ことをサポートする必要があると考えた。

## 3. 大学の現状

- ①大学全入時代となり、明確な目的が持てないまま、大学に入学、卒業、就職をする学生が見受けられる。
- ②双方向型授業として、アクティブラーニング型授業が導入されるも、それだけで解決できてはいない。  
実際に失敗事例として、下記のような点が挙げられている。
  - (a) 成績評価が連動しないとやる気を持って取り組まない。
  - (b) 学生の貢献度に差が出る。
  - (c) 企業との連携の場合は、教員が成果を出す必要があると考えて、教員主導で企画をしてしまい学生の学びの機会を奪ってしまう。
- ③カリキュラムや制度によって縛られている。授業科目数が詰め込み式で、授業内学習が多い。日本と欧米を比べると、1週間に20時間以上の授業内学習が行われている割合は、欧米では7.7%であるのに対し、日本では44%である。

## 4. 役割を果たすために必要な取り組み

上記のような現状を踏まえて考えると、主体性をなかなか表現できない環境であるといえる。私たちの班では学生が何に興味を持てるかを追求し、自らの興味の中で課題設定を行い、その実現に向けて私たちがサポートする必要があると考えた。

## 5. 問題点の深堀・解決策の検討

主体性を発揮できる現状でないことの問題点を以下の通り整理した。

- ・「大学が用意した環境と学生が求めていることとのミスマッチ（＝消化不良）」が起きている。  
卒業要件を満たすための単位修得に固執するようになっているのは、学生の声を十分に吸い上げできていないことが原因であるといえる。

その解決策として、①学生に方向性・新たな発見を見出すヒントを与える、②いつでもどこでも誰とでもをICTの活用などでより実現可能にさせることを大学がサポートしていくべきであると考えた。大学の役割や現状を踏まえて何が重要なのか、拾い上げられていない学生の声を聞いて主体性を向上させる為の対策が必要になると考え、主体性向上サポートのための具体例を検討した。

## 6. 大学のイノベーションの提案

学生の方向性を考えて、その後の実現を支援することを目的として提案を行う。

- ①学生に新たな方向性、発見を見出すヒントを与えるための手段として、診断テスト、学生へのヒアリング、講演会を実施する。

《i》簡単な適性検査（診断テスト）で学生の興味・関心を聞き出し、これらをICTで集約しデータ化する。

【実際の導入事例】立命館大学『社会人基礎力診断テスト PLOG』

PLOGとは河合塾とリアセック社が提供するアセスメントで、「基礎力」として整理されリテラシー（知識を活用して問題を解決する力）とコンピテンシー（経験により身に付いた行動特性）が測定できる内容となっている。立命館大学では下記の趣旨で行っている。

1・2年生・・・将来“やりたいこと”の実現に向けて、卒業までに“大学生活でやるべきこと”が分かる。今の自分の強みや課題が分かり、“今後どのように大学生活を過ごせばよいのか”のヒントとなる。

3年生・・・今後の進路選択で把握しておくべき、“強み”が分かる。

4年生・・・“やりがい”を持って、“楽しい社会人生活”を送るため、“今後、どのように働いていけばいいか”が分かる。

⇒これらの内容は就職に向けての診断テストの要素が強いが、より興味を探るような内容の診断テストの開発が必要になると考える。

#### 《ii》ポートフォリオ化

出てきたデータを元にポートフォリオ化を行い、学生個人のページで、興味の近い分野の学び情報をSNSやポータルサイトを活用して提供する。例えば、関心のあると思われる授業の提案をし、授業選択に一役かたり、課外活動として取り組みたい内容の具体的なイメージをつきやすくさせるといった効果を期待する。

#### 《iii》コミュニティの構築

好みの似ている人と新たなコミュニティを構築し、今後の学生生活で主体的な活動を促せるよう情報共有できる環境を整える。その人の学びを引き出すことで、自主性を引きあげることが出来るのではないかと考える。

②「いつでもどこでも誰とでも」を可能にする。

・いつでも・・・興味の対象が変わるような時でも（機会）  
例）新入生、就活生

・どこでも・・・オンラインや窓口（face to face）を通じて（手段）意見を吸い上げる。

・誰とでも・・・教職員や企業の方、そして地域の方々（人）とも繋がれるような環境づくりをつくっていく。

#### 【実際の導入事例】

早稲田大学では、「コ・ラボ西川口」を活用して、大学・商店会・NPOの協働によるユニバーサル商店街の再構築を行っている。地域資源を活用したお弁当の開発や西川口の商店街の魅力を学生目線でブログにより発信し、若い感性での提案をした。

### 7. まとめ（—イノベーションにより考えられる効果と大学職員に求められる役割—）

学生が本当に興味を持ったことで課題設定をし、それをどのように実現させるかを、共通のコミュニティの人と課題解決に取り組める。一方的に与えられた課題とは違い、主体性を持って取り組めるからこそ、現状で問題とされていた部分を解消できる。

大学職員は、診断テストやポータルサイトでの情報発信といったシステム面の構築および運営、企業・地域と繋がる為の土台作りといった点でサポートを行っていくことが必要であるといえる。

以上